

# コンタクトプレーを正しく見極める

## ～ハードプレーとラフプレーの整理から～

### スライド2

【平成30年審判員の目標を立てるにあたってのコンセプト】を、ここでは説明します。

平成28、29年度と掲げてきた審判員の目標は、「正しいステップの評価と判定」「ハードプレーとラフプレーの見極め」の二本柱であった。

平成30年度は、その中でも、ハンドボールの競技特性である、「激しいコンタクト」、「スピーディーなゲーム展開」を活かしていくために、「ハードプレーとラフプレーの見極め」の一本に絞っていくこととする。

今日、インターネットの普及により、世界各地のゲームが見られる環境はプレーヤーや指導者のみならず、観客の目も肥えてきているといえる。

このような状況の中で、2019年、2020年、そしてその先を見据えたとき、1点を争うプレーに対して我々レフェリーサイドが競技特性やゲームを理解し、整理した上で、解決していかなければならぬ課題であると考え、平成30年度の目標として、掲げることとする。

### スライド3

【ハードプレーとラフプレーを見極めるために必要なものとは・・・】を、これ以降のスライドで説明します。

競技規則第8条「相手に対する動作」は、攻撃側、防御側の双方にあてはまる。

レフェリーは、「身体接触の際、両者の位置関係」はどうであったのか、また、違反はあったがその「違反を受けたプレーヤーへの影響」はどうであったのかを、正しく見極めなければならない。

### スライド4・スライド5

競技規則8：1に記載されている「許される行為」を踏まえ、【ハードプレーの定義】

防御側プレーヤーが

- ◆ 攻撃プレーヤーの正面で位置を取り
  - ◆ 競技規則8：1の状況（例えば、曲げた腕を使って）であるならば
  - ◆ （例えジャンプしている相手に対しても）相手の安全面を守ることを前提とした
- 防御行為が保障される。

レフェリーは、例え接触の度合いが強かったとしても、これを「ハードプレー」として認めなければならない。

## スライド6

**【映像】・・・2015年女子の世界選手権決勝：ノルウェーv s オランダ YouTube 中の「IHF - Education Centre」というチャンネルで視聴することが可能**

DFプレーヤーは、曲げた腕を使いながら、相手正面に入り、ついていつている。

## スライド7

**【映像】・・・2017年男子の世界選手権：アルゼンチンv s エジプト**

DFはボールを持ったOFプレーヤーに対して、先に正面に位置を取っている。

レフェリーの判定は正しい。

オフエンシブファール。

相手チームのフリースロー。

## スライド8

**【映像】・・・2017年男子の世界選手権：フランスv s スロベニア**

DFは積極的に前へ動きながらコンタクトを試みている。

決してオフエンシブファールにはいけない。

違反を受けたプレーヤーへの影響もないため、罰則は不要。

ゴールイン。

シュートを外したとしても、そのまま継続。

## スライド9

**【映像】・・・2012年ロンドンオリンピック**

DFは相手に対して、正面からのコンタクトを試みている。

決して罰則を適用してはならない。

ピポットも明らかな得点チャンスを得ているわけでもないので、OFチームのフリースロー。

それ以外の判定はない。

## スライド10

**【映像】**

ピポットがボールをキャッチし時、DFはピポットへのコンタクトを止めたため、ピポットは、ボディーコントロールを失わずにシュートを打ち切った。

ゴールイン。罰則は不要。

シュートを外したとしても、そのまま継続。罰則も不要。

## スライド11

### 【ハードプレートラフプレーの見極めの際の、事実判定の根拠となるものは…】

我々レフェリーにとって、ハードプレーとラフプレーの見極めを行う際の大切な判断基準となるのは、以下の示すものとなる。

- ①シュートを打つプレイヤーのボディーコントロールは失われているのかどうか  
⇒シュートを打ち切ったかどうか
- ②シュートの後に、動けないほどの影響があるか否か  
⇒DFと接触していても、ボディーコントロールを失わずにシュートを打ったならば、その結果、シュートを外したとしても、競技は中断しない。「違反があったから」ではなく、違反はあったが、それは「影響があったかどうか」という事実判定が根拠となる
- ③そのコンタクトは、ボールに対するプレーなのか

## スライド12

### 【ゲームの流れにのる】

もしも、ボディーコントロールを失わずにプレーできているならば、レフェリーは、スピーディーな「ゲームの流れを重視」し、7mスローの判定や罰則の適用などにより「安易に競技を中断してはならない」。

このことは、レフェリーとして「ハンドボールの面白さを表現できるかどうか」のポイントとなる。

## スライド13

### 【違反行為の影響】を観察する

競技規則8の3には、「どの罰則を適用するか判断基準」が、明文化されている。

その中でも、「d) 違反行為の影響」を正しく観察することが、コンタクトプレーを見極める際の重要なポイントとなる。

## スライド14

### 【ラフプレーの定義】

もし、横や後ろからボールを対象とせず不利な位置から接触を試みたならば、競技規則8:2、8:3の判断基準を基に、「ラフプレー」として判定しなければならない。

## スライド15

### 【映像】

シューターは、最終的にDFのコンタクトなしにシュートを打ち切っている。  
ゴールイン。

違反を受けたプレイヤーへの影響もないため、罰則は不要。

シュートを外したとしても、そのまま継続。罰則も不要。

## スライド16

### **【映像】2015年女子の世界選手権：ルーマニア v s ブラジル**

ボディークントロールを失わずにシュートを打ち切っている。

ゴールイン。罰則は不要。

シュートを外したとしても、そのまま継続。罰則も不要。

## スライド17

### **【映像】**

シューターへのコンタクトの影響はなく、ボディークントロールを失わずにシュートを打ち切っている。

ゴールイン。罰則は不要。

シュートを外したとしても、そのまま継続。罰則も不要。

## スライド18

### **【影響を見て=なんでもかんでも OK】というわけではない**

影響を見るといっても、開始直後から、2分間以上の退場を判定する可能性も十分にある。

レフェリーは、8：4、8：5、8：6、8：8、8：9、8：10と、準備をしておかなければならない。

## スライド19

### **【映像】・・・2017年男子の世界選手権：クロアチア v s サウジアラビア**

試合開始直後であっても、後方からのプッシングには、即座に2分間退場を判定しなければならない（警告では不十分）。

シューターは明らかな得点チャンスを妨害されたため、7mスローを判定する必要がある。

## スライド20

### **【映像】・・・2017年男子の世界選手権：ドイツ v s クロアチア**

相手を背後から捕まえ続けているため、即座に2分間退場とする。

## スライド21

### **【映像】・・・2017年男子の世界選手権：フランス v s ノルウェー**

相手を背後から捕まえ続け、さらに引き倒したため、レフェリーは即座に2分間退場とすべきである。

## スライド22

### 【指導部門、強化部門が考える「世界で戦っていくために必要なもの」】

ここまで「ハードプレートラフプレーの見極め」ということで映像を見ながら整理してきたが、ハンドボール競技は、いわば「戦いの競技」と言え、その中では「コンタクトの発生は必然的である」と言える。

2019年、2020年、そしてその先を見据えたとき、コンタクトプレーの中で、世界と戦っていくために、指導し、強化していくことが重要であると指導、強化部門は捉えている。

## スライド23

### 【これからのレフェリーの役割】

指導側、強化側のこのような流れの中で、我々レフェリーのこれからの役割として

- ◆世界の流れである「スピーディーな展開」を目指し、決して独りよがりの笛ではなく、またゲームを作るのではなく「協力する側」として競技規則を適用していくことが求められる。
- ◆罰則を適用するか判断基準として、①位置②部位③程度④影響を示している競技規則8：3で、特に「影響」を見極めて機械的に判定をすること。  
これは、不必要な笛を減らしていくことにもつながり、「スピーディーなゲーム展開」へとつなげていくことができる。
- ◆そしてこれらを行うためには、プレーを「正確に観察できる」良い位置を探し、しっかりと動くことが求められる。

「動く」ことを怠り、位置取りが悪くなってしまうと、段階罰、アドバンテージの判定などレフェリーの課題の多くに起因する原因に繋がってしまう。

そのため、レフェリーは、動くための運動量が求められる。

しかし、「動く」だけを求めるのではなく、最終場面までの「過程を見ること」、シュートモーションに入った時などは「止まって観察すること」も、我々レフェリーには必要となる。

## スライド24

### 【前半のうちに基準を示す】

また、前半のうちに

「インフォメーション」「ボディランゲージ」「段階的罰則」

といった様々な手段で基準（許容範囲）をプレーヤーやチームにうまく伝えていくことが、ただ単に罰則を与えて示すよりも、はるかに有効的である。

その意味は、後半に罰則を適用する必要がない・・・つまり、「いかに6対6でハンドボールをさせるか」ということにつながる。

しかし、そこには、もちろん「罰則を適用する準備」は必要である。

（出さなければいけない場面も、可能性として充分にあり得るから・・・）

※8の5の【注】に記載されているような「身体的衝撃の小さな違反」とは、意味合いが違うので、混同しないよう注意する

## スライド25

### 【一試合を通して】

これを踏まえ、レフェリーは、60分のゲームの中で

「起きた現象」だけでなく、「プレーの質」を見て判定することで、「良いプレーを保証し、悪いプレーを排除」していかなければならない。

今日、ここで挙げてきた映像でも、少なからず感じたと思うが

●プレーの継続●フリースロー●7mT●ターンオーバー●罰則の適用など

ハードプレーにもラフプレーにもなりうるプレーの中で、レフェリーは、常に「全ての可能性」について準備をしつつも、違反を受けたプレーヤーへの影響を見極め、罰則を適用するかどうかの判断をしていかなければならない。

## スライド26

### 【レフェリーとして、日々、準備していかなければならない】

## スライド27

### 【ハンドボールの発展のために】

そして、Team JAPANとして、レフェリー、指導、強化、(もちろん選手も)が一体となり

「スピードハンドボール」「パワーハンドボール」の追求と発展を求め、皆でトレーニングを積んでいかなければならない。